天と大地と魔界と

音舞羅 阿瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天と大地と魔界と

【Nコード】

N3526M

【作者名】

音舞羅 阿瑠

【あらすじ】

「そうね…あなたが一回死ねば…」
いきなり空から降ってきた人「天使」
そしてそれを追うのも「天使」
一回死んだ僕は「天使」

天界と地獄界。

神様と閻魔。

魔法と脳加速。

天使狩りの反逆組織「レジスタンス」

人間であり、人間ならざるもの。

天使であり、天使ならざるもの。

巻き起こる様々な事件はまさに驚天動地！

授業中の妄想から生まれた時雨 恵の異色ファンタジー
僕にしては珍しいちゃんとした戦いファンタジーもの！
ここにあり

1章「天使」

「Angel Magic」

1章「天使」

野原でたたずむ制服姿の少年。水谷 信司はただ、空を見つめていた。

何か面白いことはおきないものかと空に手を伸ばしてみたりもする。

「ああーああ…退屈だなあ…学校も終わったし、家に帰ってもすることないし…」

ため息をつく信司は野原の上に寝転がった。

太陽から降り注ぐ光がやわらかく信司を包み込む。草原を吹き抜ける爽やかな風は、ほどよく冷たくて気持ちがいい。

「いつそのこと、空から何か落ちてはこないかなあー」
信司がそうつぶやいた瞬間。信司の視界にとんでもないものが映った。

「空から…人？」

そう。空から人が落ちてくる。いや、人なのだろうか。翼が生えているようにも見えなくはない。

しばらくして、信司はそれが人間だとはっきり断定した。だが…

「っ…翼…？」

翼を背中から生やした人間が空から落ちてくる。いや、降りてくる。いや、舞い降りる？

…いや、どれにも当てはまらない。

「なんだろう…あれ」

信司は立ち上がった。立ち上がり、空を見上げ、序々にこちらに迫ってくる翼の生えた人を呆けた顔で眺めている。

そりゃ、空から人が降ってきているのだから、驚くのは当然だ。しかもただの人ではなく翼の生えた人なのだから驚くどころの話では済まされない。

「あ…って、うわあっ！」

そして、その鳥人間は地面へと 着地した。

「あ、あの一…すいませーん」

「ふー。取り合えずはここで身を隠すしかないか。」

『身を隠す？いやいや、ここ野原だし。隠れるとこないし』

「すいませーん。あの一、聞こえてますかー？」

「…」

「すいませーんっ！」

『もういい。』

「あの！無視しないでくださいっ！」

信司はいい加減苛ついて来たのか鳥人間の肩をたたく。

「ひゃあっ！…っもう、もう敵っ！？」

鳥人間は信司の方を振り向いた。

『き…綺麗だ…』

信司は心の中でそうつぶやいてしまった。

黒髪長髪。清楚な顔つきの女の子。真っ白な腕や足。風でひらひらとゆらめくスカート。どれをとっても、綺麗で思わず見とれてしまっただ。

「あ、あのすいません。さっきから呼びかけているんですけど、反応がないものでつい」

「ん。あ、ああさっきの声と手はあなただったのね。ごめんなさい。見えると思っただけでなかったもんだから」

「あんまりよくわかんないんですけど、その…何で空から？ていうか、なんで翼が？」

信司は思ったことを率直な質問にしてしまった。

「んー、いいわ、教えてあげる」

少女がその言葉を発したと同時に前方から炎が迫る。そして、その炎の奥から人影。同じく翼をはやした人間が見える。

「よけてっ！」

「えっ、ちよっちよっ！ 何この状況！」

「いいからよけてっ」

信司は言われるがままに炎を右後に跳躍してよけた。炎が過ぎ去った途端。人影がはつきりとした輪郭を帯びた。

翼の色は赤色。ちなみに少女の翼は天使のような真っ白な翼だ。

「防御の旋律」

少女はそう唱えるようにつぶやくと、オカリナを構え、演奏をしはじめた。

その音色はとても美しくやわらかい太陽の光のようだった。そして、

その音にみるみるうちに包まれて信司達の周りにはいつの間にか光の壁ができていた。

「ふー。やっぱり私一人で立ち向かうには無理があるか。」

「あの、なんなんですか？また翼の人が…」

「そうだったね。説明するわ。」

「お、お願いします…」

少女は自らのこととそしてこの翼のこと等を話し始めた。

「まず、私の名前は中野 彩音。で、この翼を持っている人は天使よ。天使っていうのは、一度人間として死んでいるの。で死んだ人の中でも選ばれた人が天使になって、もう一度人間界に降りることができるの。普段は人間と同じよ。でもね、戦闘中になると人間には姿が見えないはずなの。」

「でも、僕には見えている…」

「そう、なんでか分かんないけどね。でね、その天使には能力っていうのがあって、私の能力はオカリナを使って演奏するの。それで、魔法のようなことが起こるの。発生器には魔法陣が描かれていますわ。ただ、私のは攻撃には向いていないから、やつを倒すのは無理。」

「だから、逃げている。ってわけか」

「そうよ。あなた飲み込みが早いわね」

「あの、なんであいつはあなたみたいな華奢な女の子を襲うんですか？」

「天使っていうのは、そういうものよ」

信司に怒りに似た感情がこみあげてきた。拳の先まで感情が伝わる。そして、ぶるぶると震えてくる。それを見た天使・彩音は首をかしげる。

「あの、僕でも勝てますか？」

「無理ね。人間じゃあ、天使はとても相手にできないわ。」

「どうすれば…勝てますか？」

「そうね…あなたが天使になる。くらいしかないかもね」

「どうすれば天使になれますか？」

問いかける信司の表情には決意の色が浮かんでいた。それを見た彩音は一層顔をこわばらせる。

「そうね。あなたが一回死ねば…」

「え、え！？ 死ぬんですか？」

「あ、いやごめんなさい。死ぬというか…あなたの脳に私の能力を直接ぶちこむわ。そうすれば、一回人間としての死を迎えることができる。そして、すぐに天使になることができるの。ただ…」

「ただ？」

信司は唾を呑み込んだ。そして、彩音の言葉にしつかり耳を傾ける。

「失敗すれば…そのまま死んでしまう。」

「え？…必ず成功する。というものではないんですか？ そりゃあ、ゲームでも転生術は成功率が低かったりその他いろいろありますけども！」

信司は一瞬凍りついた。だが、瞬時に元の表情に戻り、深呼吸をひとつ。

「わかりました。やりますっ！ 僕を天使にしてくださいっ！」

「あなた、本気？ 死ぬかもしれないのよ？ それに、あなたの現実をひん曲げることになるわ。」

「いいんです。ここで放つてはおけないし、それに僕は…こういう非現実的なことを望んでいたんだ。」

彩音は一瞬考えた。もし失敗すればこのひとは死ぬ。だけれど、ここでこの人が天使にならなければ彩音も信司も死ぬ。

「わかったわ。やりましょう」

「お願いします。」

「天の旋律」

そう唱えるようにつぶやくと彩音はまたオカリナを演奏しだした。その音色は信司の脳内に響きわたり、そして…信司の世界が…変わった。

「ここは…？」

目を開けると信司の周り是一片真っ白な光に覆われていた。ここが天界というやつなのだろうか。

そして、ここから天使に生まれ変わるのだろうか。そんな思考を巡らしていた時。

聞き覚えのある声が響いた。

「信司かい？」

「おばあちゃんっ！」

「久しぶりだね。さあ、こっちへおいで……」

信司がその声の元へと行きかけたその時。また声が響いた。

「行っちゃあだめよ！」

「え？」

「それは、死後の世界へと誘い込む罠よ！ そっちに行ったら、戻ってこれなくなるわっ！」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「このまましばらく待ちなさい。いい？ 知り合いの聲がしても聞いちゃだめよ？」

「わかりました。」

信司は、耳をふさいで目を閉じてこのままじっと待つことにした。

そして、数秒経過したかという時に信司を一筋の光が包んだかと思うと……

「あれ？ここは……さっきの野原？」

意識は現実へと戻っていた。

「よし。成功ね、試しに能力を使ってみましょう。」

彩音がそう優しく言くと、信司は立ち上がり

「どうすればいいの？」

と質問をした。

「簡単よ。まず、空中に魔法陣を書くの。魔法陣の形はよく漫画で見るような形よ。六方を丸で囲むのよ。」

信司はうなずくと、言われた通り空中に六方を丸で囲んだ魔法陣を描いた。

すると、それが光りだして中から手袋と靴が現れる。それらには魔法陣が描かれている。

「次にそれを受け取って、解放と叫べば翼が生えて能力が使えるようになるわ。そして、飛べるようになる。」

信司はまたもうなずくと、言われた通り解放と叫んでみる。だが一向に翼の生える気配がない。

「あれ…？翼が生えないけど…？」

「おかしいわね…んー、手袋と靴はいつの間にか身についているから、合ってると思うんだけど…」

彩音が首をかしげる。そして、信司は背中をがんばって見ている。やはり翼はない。

「…いいわ、ために能力を使ってみなさい。なんなのかわからないから、とりあえず手袋に力を込めてみて。」

信司はうなずくと手袋の魔法陣が描いてある掌に力を込める。目を閉じて集中し、力を込めているとだんだん手に空気が集まってくる感覚がしてくる。

「なんか、掌に空気が集まってる感じですよ。」

「そう、たぶん。あなたの能力は空気変化ね。」

彩音は淡々と告げる。信司は首をかしげ尋ねる

「それ、どんな能力ですか？第一、翼が生えていないと能力使えないんじゃない？」

「たぶん、あなたは例外ね。天使と人間の中間。ってところかな、

たまにあるのよ。

それで、空気変化っていうのは空気をいろんな物質に変えることができるの。じゃあそのまま何か武器を想像してみて？」

「わかりました。やってみます」

信司は、集めた空気を圧縮して刀を想像した。

するとその空気はみるみるうちに刀の形になり、信司の掌の上には刀が握られていた。

「す…すごい…本当に、刀になった…！」

「その調子だよ。」

「これで、戦えるな。彩音さん。よろしく」

「こちらこそ、よろしくね信司君」

そう言い、お互い握手を交わすと、ほつたらかし状態の敵に向かって勢いよく走り出した。すると、すぐに信司は違和感を覚えた。なぜなら、信司は空気を蹴って跳んでいるからだ。そして、尋常じゃないほどの速さで進んでいる。

「なんだ…これ…跳んでる…」

「ああ、さっきの靴のおかげね。翼がない分跳べるようになってるのね」

「そうなんだ…」

信司は、敵との距離をどんどん詰めていく。そして残り一メートルに達しようという時、彩音は立ち止りオカリナを構えた。そして敵は煙草を取り出す。

「っち…天使が増えたか。それにしても、イレギュラーだな…こ

いつは」

「そりやどうも、僕はイレギュラーなのが大好きなんでね。ほめことばですよ」

「俺もそういうの嫌いじゃないけどね…邪魔をするやつは…むかつくんだよ！」

敵が煙草に力を込めると、煙草から炎が生まれる。そして、敵の手に炎があつまる。

「それがあんたの能力？」

「そうさ、煙草から炎を生み出し操る。素敵だろう？」

「そうですね。素敵です」

信司はそういうと、持っている刀を横に振るう。昔から剣道をやってきたが、実際に刀を手にするのは始めてだ。そして、敵はその斬撃を跳躍してかわす。

そして、炎を打ち出してまた煙草を構える。

その炎を空気でバリアを作って防ぎ、敵の元へと詰め寄る。そして彩音はオカリナを構えて唱えるようにつぶやく

「低下の旋律」

演奏を始めると、敵の動きが遅くなった。どうやら速度が低下する旋律らしい。

「彩音さんっ！ありがとっっ！」

そう言うとき信司は、空気で8本の針を創造し、それらの針は敵めがけて飛んでいく。そして信司は上に跳んで刀の切っ先を下に向ける。

「うまいじゃないか…本当になりたてかい？」

「まぎれもないなりたてほやほやの天使だよ」

信司の刀は敵の手を貫いた。敵はうめくこともなく、平然と立っている。

「…っ！ やばいな…さすがの俺でも天使二人相手はきついか。しかも相手が空気変化能力とは…よし。一時退散と行こう。じゃあねまた会おう。イレギュラーな天使君」

敵は、手を振るとどこかへ飛んで行った。

信司はその場に膝をついた。同時に彩音が信司に駆け寄る。

「信司君、がんばったね。ありがとう」

「いやいや、襲われてる女の子を守るのは男としては当然というか…それに彩音さん、きれいですし」

「ありがとう。あのね、さん付けやめてもらえないかな？あと、敬語もね」

「う、うん。」

「立てる？」

彩音は信司に手を差し伸べた。信司もそれを取った。そして、彩音はどこかへ立ち去ろうとする。

「ねえ、どこ行くの？」

「どこだろう…んー。家もないし、どこに行くかわかんない。」

「そっかあ…ねえ、だったらさうち来ない？」

「え？」

彩音は驚いた様子で信司に振り返る。

そして信司は言葉を続ける。

「行くところないでしょ？ それに、また一人でいたら襲われた時どうすんのさ、それにもっと詳しく天使のことしりたいしね」

「そっか…そうだよね。ありがとうっ」

彩音は笑顔で信司に礼を言う。

最初は無表情だったのに、今はすっかり笑顔だ。信司はあまりの可愛さに見とれてしまった。

「どしたの？案内してよー」

「あ、うんっ じゃあ行こうか。」

信司と彩音はゆっくりと一緒に家へと向かった。

1章「天使」(後書き)

はい！

はじまりましたっ

ニューシリーズ！

Angel Magic

直訳すると天使の魔法

え、イタリア語じゃないのだった？

いいじゃないですかぁー

たまには英語も

いやぁー、まだまだ謎が多いですね

そりゃあ、最初だからですけども

天使の現状が次回明らかになります

そして今回はなんと！

珍しく喋る剣やら銃やら時計やら

喋る物体が登場しません><

そういうのが好きな方はごめんなさい

今後ともウーノ！とこの

Angel Magicをよろしくおねがいします

2章「神様って言うのはそういうものです」

2章「神様というものはそういうものです」

信司は幼いころから、非日常にあこがれていた。何も変わらない学校生活。部活に入っていないのです。ことがなくネットに逃げ込む放課後。

そういう当たり前すぎるのが、信司は嫌で嫌でたまらなかった。けれども、先ほどの一件のおかげで信司は非日常に巻き込まれたのだ。ここは、巻き込まれてしまったというべきなのだろうが信司にとっては願ってもないことだったのだ。

「で、聞かせてください。もっと天使について、詳しく…そうではないと僕はこれからどうすればいいのかわかりませんし、戦い方ももう少し学びたいし」

信司は誰もいない家に彩音を連れ込み自分の部屋。2階の階段を上ってすぐ右の部屋で、彩音に天使についての説明を求めている。

「そうだったね。教えるわ」

彩音はゆっくりりと、語りだした。

「もともと天使って言うのはね、ある者と戦うためにあるんだよ。」

「あるもの？」

「そう、えつと…地獄の人ね。分かりやすくいうならば、魔物？ 魔人？ ってとこかな」

信司は、一瞬 は？ と思っってしまった。そりゃあ、天使がいるくらいだから魔人や魔物がいてもおかしくはないがいきなり言われるとやっぱり思っってしまう。

「魔人。ですか？」

「そうだよ。その魔人っていうのもねやっぱり元は人間。だけれど生前に人殺しなどをした人が地獄似堕ちるでしょ？ そういう人達全員が、魔人と化するの。魔人には基本的に心はないわ。形も変わるの。」

「心が…ない？」

信司は首をかしげる。

心が無いというのはどういうものなのだろうか。想像がつかない。

「そう。泣きもしないし笑いもしないわ。もちろん、人間らしい言語を発することもない…：そうね…：化け物という表現が正しいかなうん、そんな感じ。」

信司は、無理やり首を縦に振った。ほんとはあんまりわからないけれど、少しだけなら理解できた。

「で、なんでその魔人と戦うんですか？」

「そうだね、理由は簡単だよ。人間を襲うから。」

「人間を襲う？ それは頻繁に？」

「そうよ。日常茶飯事のように起きてるの。」

「でも、そんなとこ見たことないですし、襲われたって人も聞いたことがない。」

「魔人っていうのはね、いくつかの種類に分類できる化け物なの。そして人間には見えない。それをいいことに襲ってその人の…」

「その人の…?」

「体を借りるのよ」

信司は脳をフル回転させた。体を借りる。それってどこかのアニメにあった悪魔のようなものなのか、やどかりのようなものなのか。

「その人の体に入り込んで、その人を演じる。そうすることで人間の目にはその人が死んでいる。なんていう風には映らないでしょ?」

「まあ、たしかに。そうですね」

「それでね、しばらくしたらまた人を襲うの。そして今度は化け物の姿じゃなくてその人の姿で。人に見えないようにね。」

「人に見えないようになって、ということですか?」

「私達天使と同じだよ。戦闘時は人間には見えない。そんな感じ」
「なるほど…」

「それで、今度はその襲った人と今まで借りてた体の両方ともに魔人の魂。まあ私達は魔魂と呼んでいるわ。それをね、分裂させて両方にもぐりこませるの。」

「そうすることで、どっちもが生きているように見せかける。と
いうこと?」

「そういうこと。飲み込みが早くて助かるわ」

彩音は少し笑う。信司は、まだ何かを考えている様子だ。

そんな信司をよそにまだ彩音は説明を続ける。

「そして、魔人の出所。地獄のことを時刻界と呼び、私達の出所天国は、天界と呼ぶわ。まあ、そのままね。」

「ああ、そうだ。その天界んだけどさ…神様って、いるの？」

「いるよー」

「会ったことあるの？」

「天使ならだれでもあったことあるよ。結構人間界に降りてきてるし」

「え、神様ってそういうもんなの？」

「そういうもんよ。それに私達の神様は、すごく絡みやすくていい人よ」

「それ以上言われると、イメージが崩れそうだ…」

信司は寝転がって目を覆った。イメージする神様と言えば、偉大で死んだ人でもなかなか会えるものじゃない。この世界を作った人物というのを思い浮かべるのだが…

「それでね、神様が地獄界に対抗するために生み出したのが私達天使ってわけ。そしてね天使っていうのは組織になっているの。」

「組織？」

「そう…オンラインゲームであるギルドみたいなものだよ」

「ああ、分かりやすい説明。」

「神様から直接任務をもらうの。それにしたがって動くってわけ。ちなみに任務の通知は携帯にメールが入るよっ」

「イメージが…てか、どれだけ現代的なんだよっ！携帯って…」

信司は、ため息をついた。

神様が携帯にメールをして仕事をさせる。というシステムは想定外だった。というか、誰にもそついう展開は想定できない。

「あと、私達天使には二つ名が与えられてるの。それも神様からもらっただけだね」

「そうなんだ…」

「そうだつ！ 信司君のこと神様に報告しなきゃあつ！ そして、アドレス教えなさい」

「会うの？」

「そうだよ。今から神様にメールして、人間界に降りてきてもらうから」

『会いたくねえー…』

信司はそう内心呟いてるのを横に彩音は神様宛てと思われるメールを打っている。そして、数秒後すぐに返事が来た。

「早っ！ 神様どんだけ打つの早いんだよっ！」

「えっと、大丈夫だつて。でね、明日学校が終わり次第この前の野原に来てほしいそうだよ。」

「明日か、うん。わかった」

「ふああ…よし、それじゃあさもう今日は、眠たいからお布団敷いてくれる？」

彩音は大きくあくびをする。

それを聞いた信司は、すぐに布団を準備して自分は1階で寝るから

と言に残し、階段を下りて行った。

そして翌日・学校

「ええ…今日からー、新しくこのクラスに加わることになった人がいる。今から紹介するから、ちょっと待ってなさい。」

ざわざわ

「男子かな？女子かな？」

「いけめんかな？可愛い子かな？」

そんな声が次々と聞こえる。信司は内心どうでもいいと言った様子で窓の外を見ている。

「よし、入りなさい…」

信司は仕方ないかと前を向いた。その瞬間。信じられないものが映った。

そこには学校の制服をまとった彩音がいるではないか。信司は驚愕で声も出なかった。

「今日から、このクラスと一緒に勉強することになった。中野彩音ですっ！よろしくお願いしますっ」

「中野、席はだな…」

「私、あそこがいいですっ！ちょうど空いていますよね？」

彩音が指差した方は、信司の隣だった。たしかに開いているけれど、彩音みたいに可愛い子が隣に居ては勉強に集中できない。まあ、もともと集中していないのだけれどそれにしても…と信司は思った。

『というか、なんで学校にいるんだよ！ だいたい、歳がちがうのに同じクラスっておかしいだろ！』

「ああ、そこでいい。じゃあホームルームは終わりだ。」

最後は半ば投げやりという風にホームルームは終わった。いつものことだ。

「信司君、よろしくね」

「よろしくじゃないでしょ。なんでここにいるの？ ていうか、歳が…っ」

「細かいことは気にしないのっ！ もっと、信司君と居たいからに決まってるじゃないの」

「冗談言わないでよ。一緒に居た方が都合がいいってことですよ」

「違うもんっ」

「いいよいいよ…ていうか、そんなに感情豊かだったっけ？」

「信司君こそ、そんな口調だったっけ？」

「あれだよ、心の持ちようっていうやつだよ」

「私だってそうだもん。」

信司君。なんて呼ばれているもんだから、信司と彩音の周りにはい

つこの間にやら人ばかりが出来ていた。信司に質問を浴びせる声。それらをほとんど言っていないほど無視し、その後会話を続け授業を受けた。

そして、あっという間に約束の時間となった。

放課後・野原

「神様あ？ 来ましたよー」

「おい、ひざまずくとかしなくていいの？」

「言っただでしょ？ 私達の神様は気軽な人だって」

「そういうもんなの？」

「神様って言うのはそういうもんだよ」

彩音は携帯の履歴をチェックしている。神様からのメールは昨日を最後に途絶えている。

そして、しばらく待っていると…

一筋の光が射してきた。

その光は、あまりにも眩しく目が痛くなるほどだった。

「来たよ。神様」

信司は目を見開き、まばゆいばかりの光を見つめた。すると、中人影が見える。

あれが神様だろうか。現れた人には金色の翼が生えていて、髪は金髪。長身の女性だ。

顔立ちも整っていて非常に綺麗。

「やあ、君が天使と人間のハーフかい？」

「は、はい！」

「そう固くなることはないよ…信司君、といったね」

「はいっ」

「彩音から話しは聞いているよ。能力をすぐ覚え、応用させてあの炎舞の天使を退却させたそうじゃないか。」

「恐縮です。」

「そんな君にちょっとしたテストをしますっ」

神様は今までが一番軽い口調で宣言した。信司は、一瞬戸惑った。

信司はテストが苦手だ。もちろんなんのテストかはわからないが、テストが苦手。テストという言葉そのものに苦手意識があるのだ。

「まあ、テストと言ってもね君が普段受けているのはまるで違う…そうだね、今から魔人を倒に行ってもらいたい。」

「魔人。ですか？いきなり実践？」

「まあ、一番雑魚いやつにするから」

「わかりました。」

「やるかい？受かったら、彩音のパートナーね」

「はいっ！やりますっ！」

彩音のパートナー。その言葉に感化されたということは、誰にも言えない。

2章「神様って言うのはそういうものです」(後書き)

スピード更新っ！笑

ウーノも地味に更新っ

休日だからねそれくらいししないと笑

3章「神様にだってそういう時はあります」

3章「神様にだってそういう時はあります」

「うん。言い返事だね、それじゃあ早速行こうか。すぐそこに魔魂居るみたいだから、そいつを思いつきり殺っちゃってっ」

「は、はい」

『殺っちゃってって、神様そういう言葉しってるんだ…てか、普通に使うなよっ！』

信司は心の中で叫んだ。期待はずれな神様と言えど、神様に突っ込むわけにはいかない。

信司は心の中で突っ込むことに決めた。

「すぐそこって、どれくらいですか？」

「ほんとにそこだよ。ほら…」

神様が指差した先には赤い服と赤いズボンに身を包んだ男が立っていた。ここから距離はそう遠くはない。というか、本当に近くだ。6mあるか、ないか。

そして顔はというと…骸骨になっている。そして手には大きな剣を持っており、何かしらの嫌な空気が漂っている。

「あれか…」

「今回は試験だから、彩音ちゃん無しで一人で戦ってもらおうよー」

「えっ！神様あっ私も信司君と戦いたいっ」

「駄目だよ、試験なんだもん。」

彩音はぷくーっと頬を膨らませて信司に向かって

「がんばってねっ」

と声援を送った。そして信司はうなずくと、昨日と同じ動作で手袋と靴を取り出して解放と叫ぶ。

それが戦闘開始の合図となり、信司はすぐに空気で剣を作り魔魂に向かつて飛び込んで行った。対する魔魂はそれに気付いたのか、信司の方に向き直り、剣を構える。

「あれは…骸の使徒。雑魚じゃなかった…」

「え、神様っ！？ こんな時に見極めミスですか？」

「うう…ごめん。ごめんよ、信司君。」

その会話は信司に聞こえていない。

聞こえていない方が、戦いには集中できるのだろうけれど、雑魚と最初に言ったので油断しかねない。

それに神様が信司のことをおだてたからなおさらだ。

そして信司は骸の使徒の懐に潜りこみ、一閃しようかとしたその瞬間。

骸の使徒の体が3つに割れた。

「…っな…割れた…？ど、ど、ど、どうなってんすか！これ！」
「そいつの能力だよっ信司君！ 気をつけてっ単純な攻撃じゃあ、あいつは斬れないよ！」

「それを先に言っつてよっ！」

信司は叫びながら後方に跳んだ。そして、上に跳び態勢を立て直し、両手を前に出して空気を集め、変換。

空気はたちまち10本の刺となり、骸の使徒目掛けて飛んでいく。軀の使徒はそれを剣で全て防ぎ切り、こちらに跳んできた。

「まじか…」

信司は急いでさらに上空へと跳んだ。そしてなかなか追いつけない。追いつけないどころか、見えない高度まで登る。

すると、空に魔法陣を描く。そしてあるものをイメージし、変換。空気は一瞬にして槍の雨と化した。

骸の使徒はさすがに避けられないようだ。

そして、骸の使徒はガードするのをやめて棒立ち状態になった。

「諦めたのかな…？」

信司は上空から秒速100mの勢いで骸の使徒の後ろに回り込む。

『いや…これは諦めじゃない。なんだ…この嫌な空気は…』

槍の雨が四方を囲み、骸の使徒に当たりそうになった瞬間。骸の使徒の体に異変が現れた。

服が裂け、その体軀があらわになった。完璧なる骸骨。そして、ほねの色が頭から爪先まで血の赤に染まる。

そして…

槍の雨をその体で全てはじいたのだった。

「は…？ え、え、えーっ！ ちょっとまってえいっ　いくら骨でもこれはないっ！　これはっ！」

「あの、神様あ…信司君。大丈夫ですかあ？」

「だいじょーぶじゃなーい？」

「なんですかっ？　そのけだるそうな声はあっ！　信司君が危ないっばいですよっ」

彩音は顔を真っ赤にして神様に大して若干の怒りを見せる。神様に怒る天使。普通ならおかしな話だろう。だけれどもこの神様については、怒りたくもなる。

「この骸骨やばいなあ…つか、どこが雑魚だよっ！」

「あはは…」

信司は何度か骸の使徒の体を斬ろうとしたが全てはじかれてしまった。

『ごうなつては剣ではだめか…』

信司は精一杯思考を巡らせた。この状況の打開策。鋼のように固い骸骨。剣では斬れない。槍も無理。刃物では無理だということだ。

『炎であぶるか？ …いや、そういえば火葬しても骨は残ってるから…無意味っぽいな。んー…考える…考えるんだ…っ！』

炎は、無理。刃物も並大抵のものでは斬れない。水…無意味。

『ん…？ ちょっと待てよ…そういえば、この力って知ってる物なら想像すれば作れるんだっけな。だったら…あれだって…』

信司はおもむろに高く跳び上がり、一瞬にして姿を消した。そして、信司はまず手に力を込めて刀を作る。

さらにその刀で空中を斬りながら四方八方へと跳ぶ。一見何をしているのだろうと思う動作だ。

そして地上に向かって空気を蹴った。彩音達から視認できるほどの高さに行き、着地。

そして信司は刀を水平に構える。

「彩音ちゃん。信司君は何をするつもりなんだろうね？」

「さあ…私にはわかりません。戦闘に関しては私はあんまりですからねえ」

骸の使徒の口から煙が漏れ、不気味さを漂わせている。それを見ても余裕の表情を漂わせている信司。彩音と神様は息をのんで見守る。

信司が一つため息をついたかと思うとその瞬間。骸の使徒めがけて飛び込んだ。

「何！？ 刀は効かなかったのにな？」

「…んー、ただ無謀に突っ込んでるってわけじゃなさそうなんだけどねぇ…」

そして信司は懐の前でまた跳躍、今度は右斜め上空へ。そして右、左。また懐への繰り返し。そして、数回それをしたかと思うと立ち止り、また上空へ飛んで帰ってきた。

すると、上空から魔法陣が描かれた槍が無数に降ってくる。そして骸の使徒の周りに魔法陣が現れ…

槍がそこに達した時、そこから眩しすぎる光が骸の使徒を包む。

そして無数の槍がその光の中へと飛び込んだ瞬間。信司は駆けた。信司はその光の中へ突っ込むと持っていた刀を一閃。そして右斜め上から斬りつけ、さらにその反動を利用して左斜め下から右に斬る。また、今度は右から左斜め上へ斬りつける。それをものすごい速さで何度か繰り返し返している。

もちろんその様子は彩音達には見えない。信司も目を閉じているので見えない。

骸の使徒も…見えていないようだ。

そして斬れないはずの骨に無数の切り傷が生まれる。

そしていくつかひびが入ったところで信司は手に力を込め空気を集めて…

骸の使徒を…思いつき殴った。

すると、骸の使徒の体に入っていた亀裂が広がり、骨は…割れた。

骸の使徒が無残に砕け散り、光も消えた時彩音と神様の目には目をつぶって立っている信司の姿しか見えなかった。

「何が起こったの…?」

「私にもわからない。彩音ちゃん、ちゃんと見てたかい?」

「光の中に跳びこむまでは…でも光の中までは見えなかった。」

彩音と神様は信司のところに駆け寄ると質問を浴びせた。

「どうやったの? 信司君」

「ああ…まず上空に跳び上がって消えた時あったでしょ? その時に、大きな魔法陣を描いたの。それと同時にこの刀。斬鉄剣をイメージして、作った。」

「なるほど…相手が鋼の様に硬いものだから、斬鉄剣なら斬れると思っただけか。」

「そういうことです。それで、今度はめまぐるしくハエみたいに跳びまわった時あったでしょ? あれ、実は…魔法陣を剣で書いてたんです。」

「ああ、あの光の発生源はあれだったわけか。」

「はい…空気で光を作れるかというのはかなり冒険でしたがね。それで、上に行って発動させてきました。実はこっそり彩音にこういう魔法陣を教わったんです。」

「えへへ… 私の教えが役にたったあー」

「それで、中に飛び込んでひたすらに切り刻み亀裂を入れました。斬れると思っただけだけど、亀裂を入れるだけで精いっぱいでした。」

から…そしてとどめに空気を集めて硬質化させてパンチ。これで終わりです」

あらかた説明し終えると信司は息を吸い込んで…

「神様っ！ あれのどこが一番雑魚なんですか！ おかしいでし

よっ！ あれが一番の雑魚って！」

「いやいやあ…ごめんごめん。あれ、実は3番目に雑魚。」

「え…？」

「神様の見極めミスよー、そういうこともあるの。神様には」

「そうそうーっ大目に見てもらいたいね」

「…ともかくっ！ 今後はもっとしっかりしてくださいっ！」

「はい…」

信司は一瞬固まった。何言っているんだろう。偉大な神様に向かって。いや、偉大なのかどうかは微妙なだけけど…という葛藤が生まれる。

それでも、まあいいかと。前言撤回だと言わんばかりに心の中で叫んだ

『よし、これからは神様にも突っ込もう』

「まあ、なにはともあれ勝てたんだからいいじゃないかあーっ」

「まあ…そうだけでも」

「これで信司君は彩音ちゃんの正式なパートナーだね」

「よろしくねーっ！ 信司君っ」

「やっぱり彩音、キャラ変わってない？」

「信司君に言われたくないっ！ それに、これが素なのよ。」

「僕もこれが素だ。」

「おやおやあー 彩音ちゃんがすぐに素を見せるなんて珍しいじゃないかあ」

神様がそう言うと彩音は顔を真っ赤にさせて

「べ…別につ、珍しくなんかないもん。この前は、初対面で…だから冷たい口調だったのよっ！」

そう自分を弁護した。神様はクスッと笑い、信司は苦笑いをしていく。

彩音は、耳の先まで赤く染めて顔を覆っている。

「よし、じゃあ今度は君に二つ名を与えよう。」

「二つ名…」

「そうだねー、君はあ…在天無天。なんてどう？」

「それ、どういう意味？ 神様あー」

「彩音ちゃんは本当におばかさんだね。字で分からないかい？」

「一応書いて説明したんだけど。」

神様の手には達筆な字で在天無天と書かれた紙が握られている。そ

れを前に突きだし、見せるようにしている。

「これは、天使であって天使で無い。まさに信司君の特徴そのものさ」

「あれ、能力で二つ名決めなかったんだあ」

「そうだね、彩音ちゃんやみんなは能力だけれど、なんか。能力でつけにくいじゃん。それに、こっちのほうが特徴的だなあって…」

神様は唇に人さし指を当て、悩んでいる。数秒悩んで信司が…

「それ、いいと思います。確かに僕は天使と人間の中間。天使であって天使でないですし。」

「さすが信司君だ。物分かりがいい。空気も読めるっ」

「神様あ？なんで私の方見て言っただんですかあ？」

「あはは…さて、そろそろ私は戻るとしよう。」

「あ、逃げた。」

「逃げだな。」

「じゃあね。期待してるよ」

神様はそれだけ言い残し、逃げるように天界へと昇って行った。

3章「神様にだってそごいっ時はあります」(後書き)

おはこんばんにちわわっ!!
どもっ時雨恵ですっ

3章書きあげました
書きあげたのは結構前なんだけど
宿題いっぱい徹夜三昧で載せる時間なかったんですっ
すいませんっ

話数ごとの感想は、音時雨へお願いします。
なお、何の小説の何話の感想なのかご明記いただけるとうれしいです
では!

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

このAngel Magic更新!3話っ!
というところをお願いします

4章「運命は木が決めているわ」（前書き）

説明臭いのはここで終わりです

途中に

ちよっとお遊び的な物をいれてますがww

4章「運命は木が決めているわ」

4章「運命は木が決めているわ」

信司は戦いで疲れた体を癒すために、すぐ言えに戻りお風呂に入
って寝てしまった。

彩音は部屋で一人携帯をぼんやりと眺めている…

翌日・学校にて

「水谷！」

「ああ、ロリコンじゃないか。おはよう」

「その呼び方はやめると言ったはずだ！」

「信司君、この人ロリコンなの？」

「そうだよー、だからあまり近づかない方がいい」

「水谷！ てめえつ冗談なのか本気なのかわかんねえよっ」

「わりいわりい、まあ彩音はロリコンうけしなさそうだから大丈夫
だな」

学校の教室で大声で喋ってるのは通称ロリコンの信司の数少ない友
達だ。

彩音は、このカオスなトークを呆れずに聞いて、クスクスと笑って
いる。

「そう言えば水谷」

「なんだ？」

「やけに中野さんと仲いいじゃないかっ
名前呼び合ったりしてっ！ 転入生だぞ！」

「いやあ、知り合いだったからさ…な？」

「うんっ、そうだよー知り合いだから転入してきた次の日でも仲
がいいんだよ」

ロリコンは信司と彩音を見比べる。

そして一言

「お前らあっ！ やけにお似合いじゃねーか！」

「はい？」

信司と彩音は首をかしげる。

彩音はその言葉の意味を察したのか、少し顔を赤らめる。

「お似合いって？ どこが？」

「そんなのも気づいてないのか！ この幸せ者めっ！」

チャイムがなり、授業時間。

信司達は授業をさぼって屋上に来ていた。

信司にとっては授業をさぼるなど日常茶飯事。

彩音は、別に授業受けなくてもいい。

と言って、ついてきた。

「たく、ロリコンの話はいつもよくわからないんだよね」
「そうなんだあー」

「あ、隅田だ…お〜いつ！ 隅田あつ」

信司は隅田と呼ばれる女子に手を振る。

そして、隅田もそれに気付いたのか手を振り返しこちらにやってくる。

「水谷君じゃない。どしたの？」

「そつちこそ、授業中に屋上なんて来てどしたんだ？」

「別にいいじゃない。それに、水谷君だって授業中に屋上でさぼってるんでしょ？」

隅田は屋上のフェンスから下を見下ろし、深いため息を一つ。

「そうだな…ははは」

「信司君、この人は？」

「ああ、僕の数少ない友達の 隅田 涼子さんだよ」

「へえ〜 友達かあー」

「水谷君、その女の子は？ 例の転入生？」

「ああ、そうだよ。 中野 彩音っていうんだ。よろしくね、こいつとはちよつと腐れ縁があつてさ…」

「わざわざ説明ありがと…彩音ちゃん、よろしくね」

彩音は隅田に向かってぺこりと頭を下げる。

「よろしく」

隅田は再びため息をつくと、階段を下りどこかへ行ってしまった。

「ああ、そういえば…まだ信司君に説明してないことあったわね」
「ん？」

「天使のもう一つの仕事についてだよ」

彩音は、屋上に座って信司の方を向いた。信司も座り、話を聞く姿勢をとる。

「天使ってというのはね、人間世界での命のバランスも取っているの。」

「命のバランス？」

「そう…自殺志願者とか、いるでしょ？」

「ニュースでよく聞くけれど、実際は見たことない。」

「その自殺志願者が自殺をするとする。そうすると、まだまだ生きるはずだった人が死ぬことになる。そうすればほんのわずかだけれど世界のバランスが崩れるの。」

「でも、生きるはずだった人が死ぬことなんて事故もあるだろ？」

「事故の場合は、定められた死よ。」

信司はびくつと体を震わせた。事故が定められた死？　じゃあ…

「それはどういうこと？」

「事故っていうのはね、運命で定められているの。ちなみに運命を決めるのは神様じゃないよ。神様は全ての人の運命を知っているけれど…」

「誰が運命を決めるんだ？」

「それはね、セフィロトの木という六道全世界を支えている木よ。」

「は…？」

木に運命を決められる？　なんだそれ

と信司は思った。思っただけでなく、口に出していたことを信司は気付かなかった。

「あらゆる宗教であるとされている物よ。」

世界樹と言っのかな…それが全ての命をコントロールしているの。死ぬタイミングも全て」

信司はもうわけがわからないという様子で彩音を見ている。彩音はそんな信司に構わず話を続ける。

「で、自殺という行為はその運命をひん曲げることなの。だから、天使はそれを阻止しなければならぬ。わかった？」

「んー、わかった。」

信司は、本当は分かっていたいなかった。というより分かりたくなかった。でも、ややこしくするのは嫌なので、うなずいた。

「物分かりがいいね」

「あ、そろそろ放課後だぞ。帰るか」

信司は時計を指差し、立ちあがる。

彩音はうなずき、信司の横に並んで歩き始める。

信司は、家に帰ってきてきて携帯を見てみると、神様からメールがあった。

内容はこうだ。

「信司君の周りに自殺志願者がいるから、見つけ出して説得するなりなんなりしてー」

という内容の割に合わず軽めの口調。

「信司君の周りに…?」

「いないと思うけど…探してみるか。明日から」

- 其の1・魔魂討伐！（たまに現れる）
- 其の2・自殺志願者説得！（こつちの方が仕事の率は低い）

天使の心得

- 其の1・能力は必要な時にだけ使うこと
- 其の2・レジスタンスに加入した人は指名手配とせよ
- 其の3・神様の命令には背くな

天使とは

天使とは、この世の秩序を守るギルド。
神様をトップとし、天使一人一人には称号が与えられる。
レジスタンスというものがあり、これは神に仇成す集団である。

イタリア・とある協会にて

「炎舞の天使がやられたそうじゃないか。」
「はっ」

「あの新米天使…利用する価値はあるかもしれぬ…」
「利用…ですか？」

「左様だ…よし、皆に次ぐ！ 彼の新米天使を見つけ出せ！」
はい！

4章「運命は木が決めているわ」（後書き）

お遊び、わかりました？

天使の仕事

天使の心得

天使とはです

いやあ、バカとテストと償還獣を友達から借りて

途中にお遊び的なのがあっただ

一回くらい入れようかなとww

そうそう、やっと物語は動き始めますよ

ウーノに比べたら早いですねw

では、感想は

音時雨の更新お知らせページへ

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

5章「嘘の人生を送ってきた」(前書き)

今回は、長いです

5章「嘘の人生を送ってきた」

5章「嘘の人生を送ってきた」

信司は、先日神様から連絡があった自殺志願者を探すことにした。だが、信司の周りと言ったらロリコンと隅田くらい。この二人は自殺などしそつにはないということ、とりあえず調査から除外している。

「どうやって調べればいいんだあーっ」

「信司君の周りなんだから…やっぱりあの二人のうちどちらかじゃないの？」

「あいつらかあ〜？ んー、考えられないなあ」

「自殺志願者っていうのはだいたい表では元気な風にふるまっているものなんだよー」

「そついうものなんか？」

「そついうもんだよっ」ということで、あの二人に的を絞るつっ

「わかった。」

信司はまず隅田を調べてみることにした。

どっちかというところ、隅田の方があやしい。
昨日のため息といい、授業中に屋上といい…
そういつた行動から、隅田かもしれない。
そう思えてきたのだ。

「なあ隅田あゝ、きょうの放課後、ちよつといいか？」

「えっ？ い…いいよ？」

「ありがと、じゃあ放課後な」

「うんっ」

信司はそう言い残し、いつもの屋上へと上って行った。

隅田は頭にクエスチョンマークが2、3個浮かんでいる様子だったが、その半面。嬉しくもあった。

「順調だね、信司君。私は嬉しく思うよ。」

「…なんでいんすかー？ 神様あー？」

「私も暇なものでねー、つつい降りて帰たくなるものなんだよ。」

「暇、なんですか…」

「天界はなんにもなくてねえー。それに比べて人間界は…おもしろいところだねー。ね？ 彩音ちゃん？」

「うん。人間界は、いろいろ娯楽もあるからねー」

屋上に上ると、神様が出迎えていた。

神様も暇らしいから、ちよくちよく降りてくるみたいだ。暇なら、天使達にメールでもすればいいのに。信司はそう思いながらため息をついた。

「で、どうなんだい？ 彼女…それっぽいかい？」

「んー、どうなんでしょーねー僕の周りと言えは彩音以外なら二人しかいません。

その二人のうちどちらかというと、先日から様子がおかしい彼女かなあーっと」

「ふむふむ。それは正しい判断だね、信司君。私は関心するよー。ははははー…」

『んー、やっぱり付いていけない。この人のテンションには』

信司はそう思いながらも、しばし神様とのトークに付き合った。そして約束の放課後…

「よっ！ 隅田、さすが約束には早いな」
「当たり前でしょ、待たせたら悪いもの」

隅田は、他人に思いやりの持てるいいやつだ。

昔から信司達との約束にいつも早く来るし、遅れたことなんて一度もない。

ノートだってこっそりと見させてくれる。信司にとって、とてもいい友達だ。

本当に自殺志願者なのだろうか…

「なあ、隅田。最近様子おかしい感じだけけど、なんかあったのか？」

「…なにもないよ…？」

信司は隅田の眼を見て問いかける。

隅田は、目をそらしつつむいて小さい声で答える。なにもないと言っているが、そんな風には聞こえない。

「うそだね。隅田は昔から、なんかあるときはそんな言い方する。なんかあったなら、僕でよければ話し聞くんよ？」

「…水谷君…ねえ、水谷君」

「ん？」

「君にだから言うけれど…」

隅田は、重い口をゆっくりと動かしてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「私ね…？ もう、嫌なの。疲れた…」

私ね？ 実はね、小さい頃の記憶が…ないの。」

「え…？」

それは思いがけない言葉だった。

隅田はいつも信司と一緒にいて、それでも違和感など感じたこともない。

ましてや、小さいころの記憶がないなど全く気付きもしなかった。

実際隅田は、思い出話にもものっかってくれたし…

「水谷君や、みんなが思い出話してる時、私ね。ものすごく辛かったんだ…だって、水谷君の事も忘れてしまってたわけだし。だけど、水谷君。無垢で、優しく…だから、言えなかつたんだ…」

「…そう、だったのか…ごめんね。気付いてやれなくて。」

「水谷君が謝ることじゃないよ。水谷君やみんなに…自分にも嘘をついていたのは私なんだから…嘘の笑顔でごまかして…もうなにもかもが…最近ね、自分の存在までもが嘘なような気がしてきたの。だから…もう…」

隅田がある言葉を発そうとしたその時、屋上に嫌な空気が渦巻いた。

そして、目の前に黒い穴ができ、そこから魔魂と思われるものが出てきた。

「…なに？ あれ…」

「隅田、あれが見えるのか？」

「見える…？ どういうこと？」

「隅田、ちょっとだけ向こう向いてて」

隅田はうなずくと、後ろを向いた。

信司はそれを確認すると、宙に魔法陣を描き、小さな声で解放とつぶやいた。

『これは…なんだろう。』

「これは…風帝…」

「なんだ、それ」

「魔魂の、強さの度合いで表わすと上から3番目に値するやつよ。その中の、一部。」

信司は身震いした。先日戦ったあの魔魂でも下から2、3番目あたりだった。

そして今度は上から2番目。なりたての天使なのに…

「大丈夫。今回は私も戦うわ。」

「心強いね」

信司は空気で刀を形成し、風帝に向かって駆け出した。まずは、横薙ぎ。すると、風帝の体が瞬時に信司の背後に来た。そして、蹴りを一発食らい、フェンスに激突。

「…ぐばっ…」

「信司君！…低速の旋律。」

彩音はオカリナを吹き始める。すると、風帝の周りに緑色の輪が現れる。

「…せいっ！」

信司は、減速した風帝に向かう。そして、腕を斬り落そうと腕を斬る。

…がしかし、奴の腕はあまりに硬く。激しい金属音を響かせただけだった。そして、低速化したにも関わらずやっぱり瞬時に信司の後ろに回り込む。

だが今度は信司も奴の攻撃を避け、態勢を立て直した。

「水谷君…？ どうなってるの？」

「ちよっとね。でも、すぐ終わるから」

「倍速の旋律」

彩音がオカリナを吹くと、信司を赤い輪が包む。

そして信司の動きが早くなった。ただでさえ早い信司の動きがさらに早くなった。

「…効力は3分。それまでに終わらせないと…」

「わかった。3分だなっ」

信司は刀を横に縦に斜めに振りまわし、宙に魔法陣を描く。そして、その魔法陣に触れてイメージ。

「荒ぶる風！トルネード！」

信司はいらない掛け声を入れる。

そして、魔法陣から大きな竜巻が飛び出し風帝を包む。

風帝はフェンスに激突。そして信司は地面を蹴った。

竜巻の風に乗り、さらに加速。

そして風帝の腹部に刀を刺した。

「刺さったっ！」

「油断しないでっ！」

『どうやら腕以外は普通みたいだなあ。』

信司は、風帝が攻撃に移る前に後ろに跳躍し、距離を取った。
そして、竜巻の中から風帝が飛び出して来た。

ものすごい速さだが、見切れない程ではない。天使の能力のおかげで脳の回転速度は増しているのだ。

信司は、刀の切っ先を前に突き出した。
そして風帝は動きを止め、後ろに跳躍。
そこからなにやらぶつぶつ唱え始めた。

「水谷君…？」

「隅田！」

気がつくとも後ろには隅田の姿があった。
後ろを向いていたはずの隅田は、こちらを向いている。そして、風帝を見つめている。

信司が隅田に気を取られている内に、風帝は宙になにかを描いた。
そしてそこから、勢いよくビームのような…それよりもっと恐ろしい何かが飛び出して来た。そいつが向いている方向は隅田。

「隅田！危ないっ！」

信司はとっさに隅田の前に立ち、宙に魔法陣を描いた。そして、それに触れ、バリアを作った。手はそのバリアに常に触れて支えてい

「……」
「だから……生きてくれ！ 僕は隅田に生きていてほしい！ だから……だ……か……」

信司はぱたりと倒れこんだ。

「水谷君！ ……この手……こんなになってまで私を守ってくれたんだ……水谷君。ごめんね。ごめん。私……生きる。」
「よかった……」

信司は隅田の頭をゆっくりとなでた。隅田は泣きながら信司を見つめている。

「信司君！ 彩音ちゃん！」

「神様！」

「まだ、動いているよ。そいつ」

「神様？ 水谷君。なに、これ？ そういえば彩音ちゃんには羽が。しかも水谷君もなんか、尋常じゃなかった。」

「説明は、後ね……とりあえずあれを退治しないと……」

「信司君、その体では無理だ！ ここは私に任せろ！」

神様は両手を広げた。すると、金色の翼が生える。

「わが身を持って鬼となれ！ 災い持って神となれ！ ジャッジメント！」

そう叫んだ瞬間。風帝は音もなく、砕け散った。

「すごい…」

「はあ…はあ…ふ〜。疲れたあー」

「あんまり力を使うからですよー」

「まあ、とにかく。その隅田つて子に説明しなきゃね、あと信司君の傷も手当しなきゃ」

信司達は屋上を後にし、信司の家に向かった。

とにかく疲れていたので全員重い足取りだった。

5章「嘘の人生を送ってきた」(後書き)

今回は、長いので読むときはしおりをはさんでちょくちょくよむか
暇な時に一気に読むかしてくださいね

今回は隅田のお話。

なぜか魔魂や解放した天使が見えた隅田。

自殺志願者。嘘の人生。

記憶障害。

少だけ次の予告をしておく

天術。魔術。

邪魂天地零。

閻魔。

という感じです

あんまり言えないから単語笑

では、感想お待ちしています

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

こちらにおよせください。

ご意見・ご要望・その他・感想

なんでもお待ちしています

批判でもどんとこいです

6章 「閻魔様は」

6章 「閻魔様は」

信司宅にて

「では、説明に入ろう。めんどくさいからあーぱあーっとやるよ?。」

神様は相変わらずの軽口で隅田に説明を始めた。

「私達はね、実はもう死んじやってるんだよねー。お化け?幽霊? …とは、ちよつと違うんだけどー。私は神様でーこの二人は天使ってとこかなあー」

「とこかなあーって、あなたが作ったんでしよう、まったく…」

「信司君は厳しいね、初対面の時とは大違いだ…ごめんごめん、脱線しそうになったね、レールを戻そう…さつき信司君が天使は私を作ったといったでしょ？ それはなぜか…君は、悪魔や修羅等、宗教上居るとされているものことは、しってるかい？」

「ええ、まあ。それなりに…」

「なら話が早い。そいつらねー、実際いるんだよね」

神様はにこやかに話を続ける。

彩音は信司の怪我の手当てをしながら聞き流している。

「そういうものがね、人間界で悪さをするんだよねー。困っちゃうよねっ で、そういう悪さをするやつっていうのも、僕らみたいにもともとは人間でねー。生前悪いことをした人が行くところあるでしょー」

「地獄ですね」

「そうそう、その地獄に落ちた人があ…ああいう魂になって出てくるんだよねー。ちなみに私達はその魂のことを魔魂って読んでるけどねー。で、そいつらを操ってるのがー君も名前くらいはご存知かなー。閻魔様だよ…いいや、閻魔君と呼ぶべきかなあ…」

神様がほんの少し難しい顔をした。

そしてすぐに笑顔で説明を再会する。

「まあその閻魔君が悪さするからーそいつらをぼっこぼこにして

やろうということでもー天使を生み出したの。ここまではいいいね？」

「はい、なんとか」

「なら、続けるよ。…えっとねー私達は普段人間として…まあ、私意外ね天使はだけど。人間として日々を過ごしているんだけど私が指示を出して、魔魂がいたよーっていつときは駆けつけてもらって、退治してもらうの。さっきみたいに…まあ、さっきのは予想外だったけどねー。それでね、戦う時は解放状態って言うんだけど、その状態は人には見えないはずなんだよね」

「だけど、私には見えませんでした。戦っている水谷も、神様も彩音ちゃんも…それにあの化け物だって」

隅田はうつむいて矛盾点を述べた。

「それが、わかんないんだよね。たぶん君の記憶喪失と関係があると思うんだけどねー」

…さて、説明終わり！」

神様は立ち上がると「じゃあー後は若い人に任せるとするかあー」とだけ言い残し、天に昇って行った。

「全く、人騒がせな神様だね」

「ほんとにね、まあいつもあだからね」

「あれが、神様なの？ イメージと違うんだけど…」

「そういうものだよ、隅田さん」

「んー、でも普通シヨックだって」

「……あの、私これで帰ります。ありがとうございました。」

「あ、うん。ばいばい」

「ばいばーい」
「ばいばい…」

隅田は急いで部屋を後にし、そのまま信司の家を出て行った。

残された信司と彩音は話した結果、ゆっくりと休むことにして「飯を食べ、お風呂に入った。」

そしてしばらくすると、信司と彩音の携帯が鳴った。

「ん…？ 誰だろう、こんな時間に。」

信司が携帯を手にとって見てみると、その内容で誰からかということとは1行で分かった。

「いやあ、二人つきりに水を差して悪いねー。今から、この前の草原に来てくれないかい？ というより、来て。ちよつと覚えのある気配が近づいて来てるんだよねー。まあ、詳細は後でね、じゃあ絶対に来てねー。ほならー」

「ほならつてなんだよほならつて、方言の使い方間違ってるし…」

「ん？ なんだったのー？」

「神様だよ、この前の草原に来てさあ」

「了解、今着替えるからちよつとまってる」

信司はリビングに降りて、冷蔵庫を開けて手近にあるアイスコーヒ

ーを飲んだ。

ブラックと書いてあるのに甘いそれは、適度に脳を活性化させて、イマジネーションを働かせてくれる。

天使の戦闘には、想像力が必要だと神様が行っていたので、信司はそれに従っているわけだ。

あんな神様だけれど、一応人の信仰心の対象になっているわけでもしかしたら、人以外の信仰心の対象となっているかもしれない人だから、信用できると信司は思ったのだ。

「お待たせ」

信司が数分ぼーつとしてると、彩音が支度を終えてリビングに降りてきた。

「うん、じゃあ行こうか」

信司と彩音は家を出てあの草原に向かった。

今回は、重要らしいから常時解放状態で向かう。

そして、草原についた途端、神様の姿が見えた。

「やあ、信司君 彩音ちゃん」

「どうしたんですか？ 今回は」

「いやあー。どうやら君達に紹介しない人が来そうなんだよね」。

あ、来そうっていうか、ここに来るっばいんだよー」

相変わらず曖昧な神様だなと信司は思った。そもそも、来るっばいとはどういうことだろうか。神様だから、それくらいの子知はでき

るだろうけど、なんであんなにため息交じりで来るっばいと言ったのだろうか。

それほど、来てほしくない人なのか…

「ああーあ…そろそろ来ちゃうねー。例の人が…彩音ちゃん、私のこのテンションで、だいたいわかるよね？」

「うん…まあ…」

（神様のテンションが下がっている。神様のテンションが下がっている！ これはどうしたものかー）

いつも奇想天外で気楽な神様のテンションが珍しく下がっている。それは、天地がひっくりかえるようなことであるということを知り、信司は彩音に言われて知っていた。

だからこれほどに驚いているわけだが…

すると、突然辺りが黒い雲に包まれ神様や彩音の視線の先には魔魂が来るときに発生する黒い渦のようなものが出てきた。

信司は今までにない圧倒的な圧力に押しつぶされそうになった。

一方神様は、頭を抱えてため息一つ。

同じく彩音もため息一つ。

…そして、渦から出てきたのは…

なんと小柄な子供。

身長は、100センチ前後で黒い服を着て黒いフードをかぶっている男の子。

そして、第一声。

「この逝かれ神ちゃまめ！」

……

「…へ？…神様、知り合いですか？ この子供」

「一応ねー。」

「だあれがこどもでちゅか！ 僕ちゃんは地獄をだいたい治めている閻魔ちゃまであらせられるよ！」

「いや、あらせられるって普通自分で言うセリフじゃないし…ていうか、閻魔って…こいつが？」

「…そうなんだよねー。このガキが一応閻魔なんだよねー」

「それになんだあ！ こいちゅは！ こんなやちゅ僕ちゃんは知らないぞ！」

「ええ、こんなお子様が僕達の一番の敵なんですかー？ なんだかなあ…」

「まあね…一応こんなやつでも、魔魂作ったりしてるし、実際強いんだってさあー」

「えっへん！ 強いんだぞ！ 参ったか！」

「そうなんだよねー。だからてこずるっていうかさー、みんな戦意喪失しちゃうんだよねー」

「強いつて、そういう意味ですか？」

「だって、私以外戦ったことないしねー」

「どっちが勝ったんですか？」

「引き分けー」

信司達は、自称閻魔様を完璧無視して話をする。対する閻魔様は、いかにも泣きだしそうな目で信司達を見ている。

「…こりゃあっ！ むちちゆるな！」

「引き分けねー。そんなに強いんだーこのこども」

「そうなんだよねー、ほら人は見かけによらないって言うじゃない？」

「…」

「そういうことかあー」

「…もう怒ったもんね！！」

閻魔様は手を広げて、手を中央に。

そして、その手の真ん中に意識を集中させている。すると、みるみるうちに黒い何かが出来上がった。

「…うおっ！」

「ああーあ、怒らせちゃったあー」

「くらええ！」

6章「閻魔様は」(後書き)

珍しく中途半端なところで終わりました！

友達に、その方がよいと言われたのでw

閻魔様、うざい・・・

ブログが復活したので

感想のほうはブログにどうぞ！

<http://playlog.jp/gzza/blog/>

7章 「お姉ちゃん！」

7章「お姉ちゃん！」

「どうわっあつ！」

「みんな、よけて！」

各々横に跳躍し、閻魔が放った攻撃をかわす。

神様が魔法陣を描き、天術発動。

雷が閻魔に落下。軽く避ける。閻魔の手から炎が放出される。

神様、それを天術で防御。信司と彩音は茫然とその攻防を見ているだけ。

天術発動。雷が四方から落下。

閻魔に直撃。うるたえるが、炎の弾を無数に増産。放出。

防御。だが防ぎきれず数個神様に直撃。

地面に膝をつく。大型の魔法陣を描き、天術発動。

だが、失敗。気力が尽きたのだろう。

「はあーはっは！ 参ったかあつ 逝かれかみちやまめ！」

「…つく…」

全員が愕然とした。その瞬間。

空が二つに割れ、光が注ぐ。

全員が驚きの眼で見守る中、閻魔は一人おびえた表情をしている。

そして、その光の中から人が出てきた。

推測身長164センチ弱。推測年齢二十前半。

サラサラの長い銀髪。凜とした顔立ち。腹部を露出した服を着て、

ジーパンをはいている。

神様と負けず劣らずの美人。

彩音は、どっちかと言うと可愛い系なので入れないでおこう。

「さ、閻魔様帰るわよ」
「お、おねえちゃん！」
「お姉ちゃん…？ あれ、姉いたんだー一人っ子ぽかったのに」
「…秋子さん…」
「久しぶりね、神様。そして始めまして、彩音ちゃんと、信司君」
「なんで知ってるんです？」
「そりゃあ、知ってるわよー。私はなんでも知ってるのよー」
「ふーん。」
「お姉ちゃん、こ、こここれは…」
「言い訳は後で聞くから、さあ帰りましょう」

類笑みながら閻魔姉は閻魔を引きづり、こちらに手を振り去って行った。

「ええ…つとお…なんだったんだろう」
「なんでもないわよ、さ帰りましょ」
「結局会わせたい人はあれだったんですね」
「あれでも一応敵の大將だからねー信司君」
「ていうか、あんな小さいのにあの強さってなんですか…」 白
書の閻魔みたいだっかし…」
「まあいいじゃない。」
「まあ、あの閻魔に関しては信司君。あまり言わないであげる？」
（なんで？）
（それは…神様の…あ、やっぱりなんでもないや。）
（ん？ ん、そっか。）

同時刻・廃工場

「あいつの足取りはつかめたのか？」

「はい。先ほど、大規模な戦闘がありましたから、おそらくそれが、その周囲でしょう。」

「そうか…ならば、今からでも準備せねばなるまい。お前ら、今から襲撃の準備を白よ。」

「……はい!」「……」

ゆっくり、ゆっくりでいいんだ。

我々の目的に近づいていければ…

天を始めとする六道全てを淘汰するために。

我復讐せん。

汝欲するものは我が手中にあり。

この、全世界の物理法則が…

翌日・学校にて

「信司!」

「ふえ? あ、隅田あ」

「隅田さん、おはようっ」

「彩音ちゃんもおはよ〜」

例のごとく授業中屋上で愉快に現実逃避をしている面々。

まあ、彩音は信司がいるから。

隅田は、もともとだが…

「あれ、ロリコンはあ?」

「あ〜、あいつなあ。なんかいないんだよなー今日」

「へえ〜、ロリコンさんおもしろいから好きなんだけどなあ〜…」

彩音は照りつける太陽を見上げ、空に手をかざしている。

まだ朝だというのに、太陽はじりじりと照りつけて人々から体力と、やる気と言つ名の精神力を奪っていくのだ。
今は夏。

夏とはいえど、夏休み入る前の初夏。

それなのにこんなに暑い等、反則的だと信司は思つたのだ。
青い空が、今では恨めしく思えるかもしれない。

「ねえ、信司〜！ 夏休み、どこか行こうよ〜」

「ん？ いいよ〜どこ行く〜？」

「信司君！ 私も！ 私もっ！」

「うん、わかってるよ。彩音も、どこ行きたい？」

「えつとつえつとつ〜！」

頬を紅潮させ、彩音は興奮気味に行きたい場所を提案する。

「私はあつ海行きたい！」

「海かあ、僕はいいよ。隅田は？」

「いいよ、海にしよう〜」

「きいーまりっ！ たんのしみい〜！」

「あ、信司！」

「ん？ なんだあー？」

「言つとくけど、ロリコンは誘わないでね」

「なんで？」

「なんでもよっ いい？」

「わかった、誘わないよ」

快く承知する。

そして、時限終了のチャイムが鳴る。

信司達にとっては常に休み時間だから、あまり関係ないが。

まじめに授業を受けている人にとっては、とてもありがたいものだ。

信司達はそのありがたい音に耳を傾けることもせず、自分たちの夏休みの予定を語った。
平和な現実逃避の時間。
何気ない一時。

崩壊まで…あと10日。

7章 「お姉ちゃん！」（後書き）

ふー

展開が……；……；

すいません、これちょっときついみたいです

この小説。はい

でも、がんばります

コメントくれるとありがたいです

普通に、活動報告にでいいんで
では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3526m/>

天と大地と魔界と

2010年10月22日12時50分発行